

# 石原秀男先生との思い出

## Memories of Prof. Hideo Ishihara

ネットワーク情報学部 松永賢次

School of Network and Information Kenji MATSUNAGA

### 1. はじめに

ネットワーク情報学部の創設と立ち上げには、多くの教職員の努力が必要であった。もしこの人がいなければこの学部はなかっただろう、と確実に言えるのは石原秀男先生である。ネットワーク情報学部の創立者と言っても過言ではないのであるが、本人が表舞台に出るのを好まなかったため、その活躍が記録として残っておらず、将来、その功績が忘れ去られてしまうかもしれない。本稿では表には出てこない、ネットワーク情報学部立ち上げの頃の石原先生の活躍を述べることで、先生の功績を残しておきたいと思う。

私は、石原先生からは「盟友」と呼ばれることがたびたびあったと様々な方から聞くが、それは1999年7月にネットワーク情報学部の準備を始めた頃から、2006年5月に石原先生が大動脈解離で最初に入院したときまでの7年近くにわたり、運命共同体のように、ネットワーク情報学部に関するあらゆる会議を二人三脚で乗り越えてきたからであろう。その頃のことを思い出しながら、書いていくことにする。石原研究室を整理している際に、当時の資料が見つかったので、それも活用しながら述べていく。

### 2. ネットワーク情報学部が認可されるまで

2001年4月にネットワーク情報学部ができるまでの話は、私が直接見聞きした1999年夏休み以降と、石原先生からかつて聞いたことを書く1999年7月までの話しとに分ける。

#### 2.1. 1999年7月まで

1995年に私が経営学部に入職してから約4年間は、石原先生とほとんど会話をした記憶がない。私は教員の飲

み会は、誘われればほとんど断らないのだが、石原先生は自動車通勤しているという口実で、そのような席にはほとんど参加することがなかった。それで、会話をする機会がほとんどなかったのかもしれない。

当時、われわれが卒業研究を担当していた経営学部情報管理学科では、ソフトウェア科学の研究を志す学生たちが、石原研か松永研か迷ってどちらかに決めていた。石原研に行く学生たちも良く知っており、彼らから間接的に石原先生のことを聞いていた。もしかしたら、石原先生も私について同じように学生を通じて知っていたのかもしれない。

専修大学に新学部を作るという話は、望月清司学長(当時)が1998年1月に設置した21世紀構想会議で持ち上がった。専修大学の会議体は階層化されていることが多く、「21世紀構想会議」ではその下に具体的な議論をする「21世紀構想委員会」、さらにその下に専門部会が作られそこで具体案が作られる。石原先生の研究室に保存されていた会議資料を見てみると、21世紀構想委員会において、新学部として情報系学部と国際系学部の2つを中心に議論が進んでいたようだ。会議の委員であった石原先生(当時経営学部助教授)と江原先生(当時商学部教授)と共同で「情報系新学部案」を1999年はじめごろにとりまとめたようで、そこには「総合情報学部」、「情報表現学部」、「情報ネットワーク学部」の3案が併記されている。21世紀構想委員会では、経営学部情報管理学科を改組する情報系学部が最終案として選ばれ、それが21世紀構想会議にかけられることとなった。

後で資料をながめただけでは、そのときの苦労はわからないものである。石原先生が私に後日、「決定をする会議で様子見みたいな感じになり、当時の専務理事に決断を迫る発言をした。専務理事から『この案が良いと思う』という発言を引き出せたので話がまとまった」と話をしてくれた。当時、40歳に満たない若手教員であった石原

先生だが、勝負所とあらば、ひるまず権限者の決断を迫るすごさがあった。

1999年7月の21世紀構想会議では、情報系新学部の案をさらに具体化することが認められ、「新学部設置に関する専門部会」が作られ、夏休みに具体案を検討することになり、私にも声がかかった。この専門部会は教員10名、職員2名から構成され、その後ネットワーク情報学部に参加する高津信三先生、齋藤雄志先生、佐藤創先生、中村友保先生、江原淳先生、石原秀男先生、私（松永賢次）の7名が含まれていた。この人選は、石原先生が中心になって行なわれたのだと推測しているが、この中からその後、学部長に4名（高津、齋藤、中村、江原）、カリキュラム委員長・教務委員長に3名（佐藤、江原、松永）が就いており、その人選の確からしさがうかがえる。

## 2.2. 1999年8月から

この「新学部設置に関する専門部会」から、7年にわたる石原先生と私の二人三脚が開始された。石原先生と私の仕事は大きく分かれていて、人選・文章作成・会議での合意を得る動きをするのは石原先生、カリキュラムプランや図表の作成は松永という分担になっていた。専門部会では、私が提案したカリキュラムプランの多くが認められ、石原先生が報告書の原案を作成した。

夏休みの短期間で集中議論してまとめた専門部会報告書では、スタート時のコースであった「コンテンツデザイン」「ネットワークシステム」「情報ストラテジー」の3コースのカリキュラムが記述され、学部名として「ネットワーク情報学部」「情報学部」「総合情報学部」の3つが候補であると記されている。

その頃のエピソードを紹介しておく。専門部会では、ネットワークシステムコースを必修だらけにした案を私が作成し示したところ、一部の委員から、こんなにきついカリキュラムで志願者が来るのか、と指摘されたことがあった。そのときに石原先生が、「厳しいからこそ、志願者が集まるのだ」と応援してくれたことがあった。コンテンツデザインコースの名称には、コンテンツという名前は高校生にわからないのではという指摘があったのだが、「年齢が上の人たちにはわからないが、若い人にはむしろわかりやすい」と石原先生がサポートしてくれた。その後、コンテンツデザインコースの人気で志願者が集まったときには、二人してほっとした覚えがある。

専門部会の報告書は、その後、21世紀構想会議、経営学部教授会、大学理事会で承認され、1999年12月には

「情報系新学部設置準備委員会」が設置されることになった。この委員会は委員長こそ出牛正芳学長（当時）ではあったものの、実質的には委員長代行の高津先生、石原先生、松永の3人で文部省（当時）に提出する文書を準備し、学内で合意を取る準備を進めていった。

情報系新学部は理事会から承認されているので、それを進めていくことは大学として認められているのだが、各事務所管、各教員と話しを具体的に詰めていくと色々面倒なことが起こるのだということを思い知らされた。この過程では、きれいごとでは済まないことが多々起こり、3人で石原研究室に集まるとは、夜の11時近くまで激論して文書にまとめ、事務方にメールで文書を送ってから帰るといった日々が続いた。最も若くて血気盛んな私が原則論を貫こうとするのだが、それでは学内で通らないと石原先生が知恵を絞って落としどころを考えるとというのが定番のパターンであった。高津先生は、われわれの口論を横で聞いていて、二人の意見が収束すると、それで行きましょう、と言ってくださり、それを学長や常勤理事に説明しに行くのだが、そこで色々と言われて、相当にストレスがかかっていたようである。

石原先生は、当時、様々な先生を訪問し、情報系新学部がうまく立ち上げられるように、説明・説得をすることをされていたようである。何かを成し遂げるには案が良いだけではダメで、足を運んで時間をかけて直接相手に説明する必要があることを、石原先生は良く知っていた。文書作りのときには常に私と一緒に仕事をする石原先生も、個人的な説得をする際には、私に声をかけることなく行動していたようだ。おそらく、何か責任が問われることが生じたときに、石原先生と私が共倒れにならないように配慮してくださっていたと想像している。

この頃、新学部の準備は「倒れる人が出るくらい大変な仕事」としばしば聞かされていた。高津先生が2004年1月にがんの療養で仕事を離れられ、そして石原先生が2006年5月に大動脈管理で入院することになり、その後、二人とも50代の若さで亡くなることになったのは、あの頃の精神的負担が大きかったのだろう。

情報系新学部設置準備委員会での、石原先生の最も大きな功績は「教育充実費」を大学に認めさせたことであろう。前身の経営学部情報管理学科では「6万円問題」が当時の大きな問題となっていた。1990年代前半までコンピュータを利用する教育・研究の中心は大型計算機であり、情報科学センターは1号館のみにあった。その情報科学センター端末室で、情報管理学科の学生が最も優

先して利用することができた。そのため、他学科より 6 万円高い納付金には合理性があったのだが、1990 年代後半になり、情報科学センターはパソコンが中心になり、9 号館ができて端末室が多くなると、他学科の学生たちも情報管理学科の学生と同じように使用できるようになってきた。そうすると 6 万円高い納付金は説明がつかなくなってきた。

そこで、事前に出費項目ごとに予算化せずとも、必要に応じて教材として学部が購入できるお金を大学に認めさせよう、というのが 3 人の大きな目標となった。これまでとは違う使用目的に使うという意味で「教育充実費」という名称を考案し、学長や理事を説得する文書を作成した。財務担当理事が参加する会議では、石原先生が理事に決断を迫る場面があり、このようにして、以前、専務理事に情報系新学部へ決断を迫ったのか、と感心した覚えがある。

その頃、石原先生が掲げていた重要なことは、退職された教員と同じ科目の教員を採用するような教員人事は行わないということであった。ネットワーク情報学部は改組転換という枠組みで作られたので、最初に理想とする教員人事をすることができなかった。学部を走らせながら、そのときどきで将来の方向を考え、適切な分野の教員を採用していくことが必要であった。この決まり毎がなければここまで学部が発展しなかったであろう。

### 3. ネットワーク情報学部が認可されてから

2000 年 12 月にネットワーク情報学部が認可されてからは、この学部の浮き沈みは自分達の責任という覚悟で、石原先生と私は最前線で頑張った。

石原先生が中心となって行なわれた取り組みとしては「パソコン組み立て」という催しがある。4 月に新入生全員にパソコンのパーツ一式を配布して、大学で土曜日一日かけて組み立て、OS などをインストールさせ、完成したそのパソコンを自宅まで送る、というものである。ネットワーク情報学部の事務担当職員 2 名は、学部が認可されてから異動してきたので短い期間で、業者からのパーツ購入、大学経理課とのすりあわせなどの準備で大変であった。「全員がパソコン組み立てをする」といった大学は他には聞いたことがなく、それを目当てに受験する高校生もかなりいた。その後の 10 年間にわたり、パソコン組み立ての催しは石原先生が主導して続いた。

入学者確保は、石原先生と私にとって最も重要な課題

であった。オープンキャンパスでの相談、入試判定、学部パンフレット作りといったあらゆる場面で、二人が担当することになった。2001 年の最初の入試の段階で、志願者確保がなかなか厳しいと感じたわれわれは、急遽、AO 入試の実施が必要だという判断をして、入試課職員にその実施を申し出た。入試の実施準備というのは、1 年前から行っているものであり、まったく新しい入試をいきなりやるといっても無理だ、と強行に反対された。このときも石原先生が交渉の先頭に立ち、相手を説得し、AO 入試を無事にスタートすることができた。

### 4. 最後に

ネットワーク情報学部の準備をしていた頃に、「20 年も持たないかもしれないような学部を作ってどうするんだ」と学内のベテランの先生に言われたことがあったのだが、石原先生は「20 年持てばいいんですよ」と反論していた。現在、1 年後に行われる 2017 年度入試に関する実施事項が徐々に決定していき、ネットワーク情報学部は 2017 年度に入学者を迎えることは確実である。彼らが卒業する 2021 年は、ちょうどネットワーク情報学部ができてから 20 年となり、どうやら 20 年持つ学部となったようだ。

将来、ネットワーク情報学部がうまく行かなくなり、そのときの若手教員たちが「石原先生や松永先生が作った学部は、あの人がいる間はつぶせないよな」と言い出しそうな雰囲気になったら、「自分たちで幕を閉じよう」と、学部の準備の頃、石原先生と話しをしていたことがあった。

石原先生とかなり長く話しをした最後の機会は、昨年（2015 年）1 月で、そのときの話題は、神田キャンパスに建設が予定されている新校舎に作る新学部構想についてであった。石原先生は、かねてからネットワーク情報学部は都心キャンパスにうつるべきだ、というのが持論で、専修大学の新しいキャンパス用地買収の噂がたつたびに、私と二人でその場所を見学に行ったものだった。残念ながら神田新校舎には、1999 年のライバル案であった国際系新学部ができることとなったが、「神田新校舎で、20 年たったネットワーク情報学部をリニューアル」できれば、石原先生の思いがかなったと思う。

ネットワーク情報学部がこの先、どのようになるかわからないが、学生の学びの場として発展していく限り、天国から石原先生が応援してくれると思う。